

【ショートレター】

「異文化理解」教育の充実を目指して†

ードイツ語共通教材導入の取り組みー

大喜 祐太*

三重大学人文学部文化学科*

本稿では、三重大学における「教養教育・教養基盤科目」である「異文化理解 I 基礎（ドイツ語 A または B）」「異文化理解 I 演習（ドイツ語 A または B）」の授業にて導入したドイツ語共通教材および共通テストに関して報告を行う。共通教材と共通テストを導入した背景には、各授業での指導内容や難易度、文法項目の進度に相違があるという状況があった。異文化理解のドイツ語学科目では、教養教育の理念に従い、各授業間で共有する教育目的や授業内容を明確化することによって、各学生が主体的な目的を持ちドイツ語の授業に向かうことができるような取り組みを進めている。

キーワード：ドイツ語, 異文化理解, 共通教材, キーセンテンス, 基本語彙, 共通テスト

1. はじめに

このショートレターでは、三重大学一年次選択必修科目である「異文化理解 I（ドイツ語）基礎・演習」における、三重大学教養教育ドイツ語学科目の取り組み、とりわけ 2018 年度から導入した共通教材および共通テストについて報告する。まず、本年度より当該授業で新しい試みを行うこととなった経緯について述べ、つづいて共通教材の内容や共通テストの実施方法を紹介する。さらに、共通教材導入におけるメリットとデメリットを概観し、最後に共通教科書の作成を視野に入れた今後の展望について考える。

2. 共通教材作成の経緯

2.1. 三重大学におけるドイツ語教育

三重大学の「異文化理解」教育は、一年次選択必修（人文・教育・医・工・生物資源）となっており、ドイツ語については、2018 年度（一年次）は、約 400 人弱の履修学生がいる。ドイツ語の授業は、火・木曜日の週二コマで、基本的には通年での履修を想定している。共通テストやそのフィードバックを含めると、授業は半年で 16 回あるため、履修学生は、少なくとも年間 96 時間をドイツ語の授業に費やすことになる。

火・木両授業の目的は、言語としてのドイツ語の基本的な構造を把握することにより、ドイツ・オーストリア・スイスといったドイツ語圏の言語や文化に対する理解を深めることである。具体的には、(1) ドイツ語の基礎的な文法を把握すること、(2) ドイツ語の基本語彙を身に付けること、(3) ドイツ語圏の文化を理解することである。

授業の名称は、「異文化理解 I 基礎（ドイツ語 A または B）」および「異文化理解 I 演習（ドイツ語 A または B）」があり、「基礎」は文法中心、「演習」は語彙・文化中心の授業構成となっている。ドイツ語 B については、火曜日に行われる「演習」で、ドイツ語 A と比べて、より会話などの実用的な能力を養うことができるよう配慮した授業構成となっているが、A もしくは B のどちらを履修したとしても、共通教材の使用と共通テストを実施することについては同様である。

学習者の到達目標について、前期は独検 5 級レベル、後期は独検 4 級レベルとしている。シラバスには明記していないものの、独検の基準に従って、ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) との対応を考慮すると、前期・後期を通じて当該科目（基礎・演習）を履修した場合に A1.2 レベルまで到達していることが望ましい。

2.2. 共通教材および共通テスト導入の経緯

共通教材と共通テストを導入した背景には、各授業での担当者が異なるため、指導内容や難易度、文法項目の進度について、当然のことながら相違が生まれてしまうという状況があった。もちろん、学生の興味や関心に合わせて、各担当者が個性に富んだ手法で授業を進めていくメリットは大きいですが、学部一年次の教養教育全体の中で異文化理解としてのドイツ語科目の位置付けを見てみると、各学習者が習得すべきドイツ語の文法やドイツ語圏の文化に関する最低限の重要事項を共有することについて明確に指針を示しておくことが求められた。そこで、前年度からのドイツ語学科目内での話し合いを経て、上記の間

題点を解決するために、2018年度前期より共通教材と共通テストを導入する運びとなった。

3. 共通教材の内容

3.1. 異文化理解Ⅰ基礎

木曜日の「基礎」の授業にて共通教材を使用する際の主な目的は、一年次に基礎的な文法事項を習得することにある。そのため、共通教材の使用では、第一に「キーセンテンス」の理解を念頭に置いている。文法項目の選定は、三重大学の授業進度を考慮したものになっている。具体的に、前後期で扱う文法項目別の範囲は、以下の通りである。

a) 前期授業で扱う文法項目

- ・ 慣用句
- ・ 動詞・人称変化（規則・不規則）
- ・ 定冠詞・不定冠詞・所有冠詞・否定冠詞
- ・ 代名詞・複数形
- ・ 前置詞

b) 後期授業で扱う文法項目

- ・ 前期の復習
- ・ 助動詞
- ・ 分離・非分離動詞
- ・ 過去の出来事の表現（過去形・現在完了）
- ・ 再帰動詞・代名詞
- ・ 従属接続詞
- ・ 関係代名詞

また、学生に配布した共通教材には掲載していないが、二年以上（異文化理解Ⅱなどの授業）で扱う内容は以下の項目を想定している。

- ・ 比較級
- ・ 形容詞変化
- ・ zu 不定詞句
- ・ 接続法二式

3.1.1. キーセンテンス

キーセンテンスの例は、以下のようなものである。（ここでは「動詞・人称変化」の項目から抜粋する。）

- (1) **Wie heißen Sie? -Ich heiße** Michaela Müller.
あなたのお名前は何ですか。私はミヒャエラ・ミュラーです。
- (2) **Bist du Student/in? -Ja, ich bin** Student/in.
君は学生ですか。はい、学生です。

(3) **Wo wohnen Sie? -Ich wohne** in Berlin.

あなたはどこにお住まいですか。私は、ベルリンに住んでいます。

「キーセンテンス」には、前後期のうちに理解すべき最低限の用例（前期：32例、後期：26例）を掲載している。CEFRで言えば、A1.1からA1.2の初歩的な学習レベルを想定してキーセンテンスを作成している。授業内では、主に火曜日に使用する「基本語彙」や「ドイツ語圏の文化」と関連させた指導を行えば、文法と語彙や文化の両方を効率的に理解することができるようになっている。たとえば、先に挙げた用例で、「基本語彙」に含まれる動詞や名詞を用いて置き換えることによって、繰り返しキーセンテンスについての練習を行うというものである。

ただし、この共通教材には、文法事項の説明などは記載されていないため、授業時に各授業担当者が文法項目を説明する際には、自身で選定した教科書や参考書に即して学生に指導することになっている。

3.1.2. 文法問題集

共通教材には、「文法問題集」が付属しており、各文法項目の説明が終了した際（もしくは授業時適宜）、この問題集を利用して、学生が「キーセンテンス」を正確に理解しているかどうかについて確認することができる。「文法問題集」の中の各設問は、「キーセンテンス」および「基本語彙」に基づいている。

3.2. 異文化理解Ⅰ演習

3.2.1. 基本語彙

火曜日の「演習」の授業では、まず「基本語彙」を覚えることが必要となる。前期・後期の基本語彙は、動詞、名詞、形容詞、副詞、接続詞、文法語彙に分類してまとめられた約400語である。（他にも、たとえば、「身の回りのもの・家具」、「食べ物・飲み物」、「町・乗り物」、「家族・ペット」「職業・身分」といったテーマごとに分類されている。）「基本語彙」には、一年を通じて暗記すべき最低限の語彙を掲載している。そのため、授業時には、これらの語彙に加えて、関連語彙を紹介することを推奨している。演習の授業でも「キーセンテンス」や「ドイツ語圏の文化」と関連させた学習指導が重要である。特に動詞の語尾変化や名詞の格変化などの文法事項について、文法を扱う「基礎」だけでなく、「演習」でも適宜確認し、学習者の理解を手助けする必要がある。

3.2.2. 語彙問題集

さらに、共通教材には「語彙問題集」も含まれており、各文法項目および基本語彙の説明が終了した際（もしくは

は授業時適宜)、この語彙問題集を利用して、学生の基本語彙の理解の確認を行うことができる。問題は、「文法問題集」と同様に10課ある。

3.2.3. ドイツ語圏の文化

演習の授業では、「基本語彙」の習得に加えて、「ドイツ語圏の文化」の理解が二つ目の主要な目的となる。前期に取り上げるテーマは、ドイツ連邦、地理、街歩き、ドイツ語圏の祝祭とそれに関連する挨拶(1)、学校制度、宗教、ドイツの都市と河川、ドイツ語圏の国々、文学、国家成立までの歴史であり。後期は、移民、ドイツ語圏の祝祭とそれに関連する挨拶(2)、そしてドイツ語圏の哲学である。

異文化理解Ⅰ演習での目標は、学生がドイツ語圏の文化を理解することにあるため、授業中に、テーマごとに授業担当者がドイツ語圏の文化を紹介することを推奨している。もちろん「演習」で扱うことのできるテーマは、初級者を対象とした一般的なものに限定されているとはいえ、今後の学習を進めていくための基盤や契機となるよう工夫されている。

3.3. 共通テスト

「基礎」の共通テストは、「キーセンテンス」および「文法問題集」に基づいて出題され、ドイツ語重要例文・文法の習得度を問うものとなっている。それに対して、「演習」の共通テストは、「基本語彙」「語彙問題集」および「ドイツ語圏の文化」に基づいて出題され、ドイツ語の基本語彙およびドイツ語圏に関する基礎知識の理解度を確認するものである。基礎・演習ともに、共通テストはごく基本的な文法事項や語彙、文化的項目を問うものであるため、授業担当者によっては、共通テストに加えて、個別のテストを行う場合がある。テストの範囲については、各授業の進度を勘案して、事前に周知することになっている。

4. 共通教材導入におけるメリットとデメリット

共通教材の導入を通じて、これまでの授業形態と比較して、学生たちが異文化理解(ドイツ語)の授業で学ぶべき内容(文法事項や基本語彙など)は明確になり、さらに共通テストを行うことによって、各学期末に自身の習得状況を客観的に確認できるようになったように考えられる。加えて、二次以降に学生が続けてドイツ語科目を履修する際には、当該科目の授業担当者が学生たちのおおよそのドイツ語レベルを学期開始前に把握できるようになり、しかも、ドイツ語圏の文化に関する基本的理解も共有できるというメリットがある。

しかし、その一方で、授業形態の変更に伴う授業運営上のデメリットもいくつか挙げられる。一つは、共通教材を導入したものの、現在のところ、教科書の選定は各授業担当者に任されているため、共通教材と教科書の進度が必ずしも一致しないということである。しかも、基礎と演習の授業では担当者が異なるため、両者が十分な連携を行っていないければ、火・木曜日の授業間で説明内容が重複するか、もしくは、十分な指導が行われないということにもつながってしまうからである。二つ目は、一つ目の問題点に関連して、やはり各授業担当者によって進度にばらつきが出てしまうことである。そのため、共通テストでは、クラスによっては実際に進んだ内容よりは少し物足りないと感じてしまうものになるケースがあった。しかし、この問題については、授業担当者が個別テストを追加することによって、共通テストのみでは十分でない学習者の理解度の把握が可能であると言える。

5. まとめと今後の展望

共通教材導入によるメリットを生かしつつ、先に挙げたいくつかの問題点を解決するために、ドイツ語担当では、これまでの共通教材の目的や内容を土台にして、2019年度以降、「共通教科書」の作成および導入を検討している。共通教材と同様に、基本的には、総合教材(文法と基本語彙の習得、ドイツ語圏の文化の理解)の作成を志向しているが、CEFRにも鑑み、基本語彙やキーセンテンスの選定について、より具体的な到達基準を与えられるような教材作りを目指している。また、2018年度前後期における共通教材導入による学習効果について、学生や授業担当者へのアンケート調査を行うことを視野に入れている。今後も各教員との議論を重ね、さらなるドイツ語文化教育の充実を進めていきたい。

謝辞

このショートレターを作成するにあたり、三重大学人文学部菅利恵准教授および大河内朋子教授に多くのご助言を賜りました。各先生方、関係者の皆様にはこころより感謝申し上げます。

† Yuta Daigi*: Towards the Improvement of Foreign Studies Education: A Case Study on Introducing a Common Textbook in German Language Classes

* Faculty of Humanities, Law and Economics, Mie University
1577 Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan